

クリスチアンの家庭生活

エペソ人への手紙 5章 21-33節

はじめに

私たちの教会では、今年から月ごとのテーマを決めています。どのテーマも信仰生活の基本となるもので、毎月第一主日は、そのテーマに従って説教することになっています。今月のテーマは、「社会生活」です。

私たちクリスチアンは、教会生活だけでなく、社会生活もします。家庭を形成し、仕事をします。家庭を形成し、仕事をするのは、人間の本来の使命です。旧約聖書の創世記にあるように、神様は人間を男性と女性に造られ、「**生めよ。増えよ。地に満ちよ。地に従えよ。海の魚、空の鳥、地の上を這うすべての生き物を支配せよ**」(創世記 1:28)とされました。そうしてアダムとエバは、一体となって家庭を形成し、神様が造られたすべてのものを管理する仕事を始めたのです。

私たちクリスチアンは、教会生活だけでなく、社会生活においても神様の栄光を現さなければなりません。私たちの信仰は、教会のことだけでなく、社会での私たちの生き方を変えるものです。どのように家庭を形成し、どのように社会で仕事をしていくのか、その原則を聖書の御言葉から学ばなければなりません。私たちは聖書の御言葉に従って、家庭を形成し、社会で仕事をしていくことによって、イエス様を証していかなければなりません。イエス様の福音は、私たちの社会生活をも回復させる力があります。

今日は、エペソ人への手紙から「家庭生活」について学びたいと思います。

1. キリストを恐れて、互いに従う

21節でパウロは、クリスチアンの家庭生活や社会生活において大切な原則を語っています。それは、「**キリストを恐れて、互いに従い合いなさい**」ということです。

私たちクリスチアンにとって「従う」ということは、大切なことです。私たちはまず何よりも、神様に従い、イエス様に従うということが大切です。神様が求めておられること、イエス様が求めておられることに、私たちは従わなければなりません。

神様は、地上の社会生活に秩序を設けておられます。夫婦の間には、夫に権威を与え、妻は夫に従うことを求められます。親子の間には、親に権威を与え、子どもは親に従うことを求められます。また職場には、上司に権威を与え、部下は上司に従うことが求められます。パウロはローマ 13章でこのように言いました。「**人はみな、上に立つ権威に従うべきです。神によらない権威はなく、存在している権威はすべて、神によって立てられているからです。したがって、権威に反抗する者は、神の定めに従うのです。逆らう者は自分の身にさばきを招きます**」(ローマ

13:1-2)。地上の社会生活のあらゆる権威は、神様によって立てられたものです。クリスチャンであっても、未信者でも関係ありません。私たちは、神様に従うがゆえに、自分の上に立てられた権威に従うのです。それがたとえクリスチャンであっても、未信者であっても、です。

私たちクリスチャンの基本的な姿勢は、神様に従う、それゆえに神様が立てられたすべての権威に従う、子どもは親に従い、妻は夫に従い、夫は職場の中で上司に従っていくのです。神様は、神様が立てた権威に従うことを通して、社会の秩序を保ち、私たちに祝福しようとしているのです。

しかし例外があります。私たちクリスチャンは、盲従的に権威に従うべきではありません。あくまでも私たちが従うべき第一の方は、神様であり、イエス様です。ですから、神様に従うことと、神様が立てた権威に従うことが対立した場合には、迷うことなく神様に従うべきです。ペテロははっきりとこう言いました。「**人に従うより、神に従うべきです**」(使徒 5:29)。たとえば、神様が立てた権威が、罪を犯すことを求めてきたり、神様に従うよりも自分に従うことを求めてきた場合は、抵抗しなければなりません。例えば、神様以外のものを拝むことを求めたり、安息日を破ることを求めてきたりする時などは、抵抗しなければなりません。また偽りの証言をすることを求めたりする時も、抵抗しなければなりません。

日本のクリスチャン人口は1%未満です。それゆえ私たちは、家庭生活においても、社会生活においても、未信者に従うということが起きてきます。その中で様々な葛藤と戦いがありますが、私たちの中ではっきりさせなければならないことは、私たちが従うべき第一の方は、神様であり、イエス様であるということです。このことを曖昧にし、妥協していくと、信仰自体が揺るがされていくことになり、家庭生活においても、社会生活においても、証していく力が失われ、神様の祝福も望めません。

2. 妻は主に従うように夫に従う

21-24 節でパウロは、クリスチャンの妻のあるべき姿を語っています。21 節には、「**妻たちよ、主に従うように、自分の夫に従いなさい**」とあります。夫婦には、神様が定めた秩序があります。それは、23 節にあるように、「**夫は妻のかしらである**」ということです。

妻は、神様に従うゆえに、夫に従わなければなりません。夫は、家庭のかしらであるという自覚と責任を持たなければなりません。日本では、未信者の夫を持つクリスチャン女性が多くいます。未信者の夫を持つクリスチャン女性にとって、最大の証しは「夫に従うこと」です。ペテロはこのように言いました。「**妻たちよ、自分の夫に従いなさい。たとえ、みことばに従わない夫であっても、妻の無言のふるまいによって神のものとされるためです。夫は、あなたがたの、神を恐れる純粋な生き方を目にするのです。あなたがたの飾りは、髪を編んだり金の飾りを付けたり、服を着飾ったりする外面的なものであってはいけません。むしろ、柔和で穏やかな霊という朽ちることのないものを持つ、心の中の隠れた人を飾りとしなさい。それこそ、神の御前で価値あるものです。かつて、神に望みを置いた敬虔な女の人たちも、そのように自分を飾って、夫に従ったのです。**

たとえば、サラはアブラハムを主と呼んで従いました。どんなことをも恐れなくて善を行うなら、あなたがたはサラの子です。](1ペテロ 3:1-6)。

妻は、「夫に従う」ということを通して、神様を証し、神様の栄光を現すのです。しかし、注意すべき点があります。それは、私たちが従うべき第一の方は、神様であり、イエス様であるから、もし神様に従うことと夫に従うことが対立した場合には、神様に従うべきであるということです。私たちは、盲従的な従い方ではなく、夫に対して「神を恐れる純粋な生き方」「神に望みを置いた敬虔な生き方」を見せなければなりません。例えば、夫が神様以外のものを拝むことを求めてきたり、日曜日の礼拝を休むことを求めてきたりした場合には、抵抗しなければなりません。安易に従ってはなりません。私たちは、私たちの信仰生活が守られ、教会生活が守られるように祈らなければなりません。神様に以上に夫に従うならば、家庭の祝福も、夫の救いも望めません。私たちは、神様に第一に従う姿を通して、夫に証をしていくのです。

3. 夫は主が愛されたように妻を愛する

25節には、「**夫たちよ。キリストが教会を愛し、教会のためにご自分を献げられたように、あなたがたも妻を愛しなさい**」とあります。夫は、妻を愛さなければなりません。しかし、自分なりに愛せば良いというものではありません。イエス様が教会を愛したように、妻を愛さなければなりません。

ではイエス様は教会をどのように愛されたのでしょうか。①第一に、自分のいのちを献げたことです。夫は、命を懸けて妻を愛さなければなりません。②第二に、イエス様は教会を、「**みことばにより、水の洗いをもって、教会をきよめて聖なるものと**」し、「**ご自分で、しみや、しわや、そのようなものが何一つない、聖なるもの、傷のないものとなった栄光の教会を、ご自分の前に立たせ**」ようとされました。イエス様が私たちのために命を捨て、十字架に架かれたのは、私たちを清めて聖なるものとするためです。まるで純白のウェディングドレスを着てバージンロードを歩く花嫁のように、汚れなき者として御前に立たせるためです。夫も、妻を信仰的・霊的にリードし、妻が信仰的・霊的に成長できるように御言葉を通して導き、イエス様の前に汚れなき聖なる者として献げるように努めなければなりません。③第三に、28-29節に「**自分の妻を自分のからだのように愛さなければなりません。自分の妻を愛する人は自分自身を愛しているのです。いまだかつて自分の身を憎んだ人はいません。むしろ、それを養い育てます。キリストも教会に対してそのようになさるのです**」とあるように、夫は妻を、自分のからだの一部と考えなければなりません。妻の喜びを自分の喜びと考え、妻の悲しみを自分の悲しみと考えなければなりません。そして、妻を自分のからだの一部として養い育てなければなりません。夫は、経済的にも、霊的にも、妻を養い育てなければなりません。

夫に対しても、注意すべき点があります。妻が従うべき方は、第一に神様であり、イエス様であったように、夫が愛すべき方も、第一には神様であり、イエス様であるべきです。もし神様を愛すること妻を愛することが対立した場合には、迷わずに神様を愛するべきです。

イエス様は、こう言われました。「**わたしのもとに来て、自分の父、母、妻、子、兄弟、姉妹、さらに自分のいのちまでも憎まないなら、わたしの弟子になることはできません**」(ルカ 14:26)。私たちが愛すべき方は、第一に神様であり、イエス様です。夫は、家族に対して、誰よりもイエス様を愛する姿を通して、証をしなければなりません。夫はあくまでも、イエス様を愛するがゆえに、家族を愛するのです。

31-32 節には、『**それゆえ、男は父と母を離れ、その妻と結ばれ、ふたりは一体となるのである。**』この奥儀は偉大です。私は、キリストと教会を指して言っているのです」とあります。

夫婦関係は、家庭の基礎であり、中心です。決して親子関係ではありません。確かに親子関係は血で結ばれていて、夫婦関係は他人と一緒にになったものですから、親子関係の方が結びつきが強いように思われます。しかし、夫婦は「父と母を離れ、一体となる」のです。精神的にも、肉体的にも一つとなるのです。これは偉大な奥儀なのです。親子関係には、肉体的に一つとなること、つまり性的に一つとなることは禁じられています。肉体的に一つとなること、性的に一つになることは、夫婦だけに許されている祝福なのです。肉体的に一つとなること、性的に一つとなることが許された夫婦は、どの人間関係よりも強い結びつきがあるものです。親子関係よりも深い親密な関係があるのです。

肉体的に一つとなること、性的に一つとなることは、神様に結ばれた正式な夫婦だけに許された偉大な奥儀です。どの人間関係よりも深く親密な関係になることです。ですから結婚以前にそのような関係を持つことは、決して許されていませんし、そのことは深い傷として残ります。

夫婦は、キリストと教会の関係を証しなければなりません。聖書に従ったクリスチャンホームを形成することこそ、私たちの証しです。夫が、イエス様が教会を愛するように、妻を愛する姿を見て、妻や子供たちはイエス様の愛を学んでいくのです。夫は、イエス様の愛を証しする重大な責任を負っているのです。妻は、教会がイエス様に従うように、夫に従う姿を見て、夫や子供たちはイエス様に従う大切さを学んでいくのです。もし妻がいい加減な従い方をしていたら、夫や子供たちもイエス様に対して従うようにはならないでしょう。

おわりに

夫婦の関係は、すべての人間関係の中で最も親密で深い関係です。最後に私たちが覚えたことは、その夫婦の関係が、イエス様と教会の关系到例えられていることです。私たちとイエス様の関係は、夫婦の関係のように最も親密で深い関係なのです。私たちは、イエス様に深く愛され、一つに結ばれているのです。私たちはイエス様の花嫁です。私たちは、イエス様が再び来られる時に、まるで純白のウェディングドレスを着てバージンロードを歩く花嫁のように、汚れなき者、聖なる者として御前に立てるように、自分を清めて純潔に歩まなければなりません。罪から離れ、聖なる清い者としてイエス様に献げなければなりません。

私たちは、聖書に従ったクリスチャンホームを形成することを通して、証していくと共に、イエス様の花嫁として、イエス様に従い、清さに向かって成長していかなければなりません。

天におられる私たちの父なる神様。

あなたが遣わされた御子イエス様は、私たち教会のためにいのちを捨ててくださいました。そして、ご自身のからだとして今もなお私たちを愛してくださっています。私たちは、御子イエス様の花嫁として、その愛にこたえて心から従うことができますように。

イエス様によって救われた私たちは、夫婦関係を通してイエス様と教会の関係を証していくように召されています。どうかすべての夫が、イエス様を誰よりも愛し、イエス様のようにならなうように妻を愛していくことができますように。またすべての妻が、誰よりもイエス様に従い、イエス様に従うように夫に従うことができますように。現実の夫婦生活は、様々な葛藤の連続ですが、あなたとの関係をまず第一に考え、あなたから知恵と導きを得て、一つ一つ乗り越えていくことができますように助けてください。

また私たちクリスチャン一人ひとりが、イエス様の花嫁として、従順と純潔に向かって成長していくことができますように導いてください。やがてイエス様が花婿としてこの世に再び来られる時まで、私たちが成長し続け、あなたが来られることを喜びつつ待ち望むことができますように。

私たちの夫であり、かしらであるイエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。